

—
漁村集落における空間構成と生活行為
—福島県いわき市豊間を事例として—

21118038

高橋 遥

指導者

葉袋奈美子 准教授

津波

防災

農村

漁村

風習

コミュニティ

1.はじめに

1-1.研究の背景と目的

福島の漁村集落の生活について、空間的な視点から詳細に明らかにした研究はこれまでも少なく、今後の震災復興のためにも詳しく調査する必要がある。

2011 年 3 月の東日本大震災による津波で被災した各地で、現在施行されている復興計画は、高台移転が中心である。しかし、高台移転後も現地で震災前から続く豊かな生活文化を持続できるのか疑問である。

本稿の目的は、福島県いわき市豊間集落を事例として、失われた漁村集落の生活を記録として残し、またその特徴的な空間構成や生活の実態を住居学の視点から明らかにし、復興後の防災を考える材料とすることである。

1-2.対象地と調査方法

福島県いわき市の沿岸は南北に続いており、いくつもの漁村集落が存在する。本研究の対象はその中心部に位置する豊間集落である。集落は広く海に面しながらも内陸側に大きく入り組んだ形をしており、古くから漁業と農業が行われてきた。漁業に関しては昭和 40 年代が最盛期で、最近では資源の減少や後継者不足により衰退し震災前に漁業専業であったのは 3 世帯のみだった。

東日本大震災では津波により、集落に存在した建物の多くが流失し甚大な被害を受けた。2014 年 9 月に災害復興住宅の建設が完了し、現在 192 世帯が入居している。

本研究では対象地内の旧家に住んでいた方を中心に、20 名の住民にヒアリング調査を行った。

2.豊間の空間構成と津波被害

2-1.集落の発生と変遷

図 1 にヒアリング調査で確認した旧家の位置を示した。集落は「樋口の館」や「フルヤシキ」という通称のつく山間部に発生したと考えられ、特に古いとされる旧家はその付近に残っている。表 1 に示した通り、これらは江戸中期頃には既にあったと思われる。それ以外の旧家は、江戸末期～明治初期に漁業や浜での塩づくりを行うために山側から海側へ移ってきたとされるものが多い。

その後、昭和 5 年に国有地であった海岸沿いの松林を豊間区が払い下げてから、海岸沿いに住宅が増えた。

2-2.旧家と津波被害の関係

図 1 から分かる通り、旧家は山際に多い傾向にある。東日本大震災で発生した津波では、高さ 2m 以上の波が到達した旧家は少ない。また、山際に住んでいたことで、すぐに高台へ避難できるという利点もあった。

3.コミュニティ形成

3-1.コミュニティごとに見る豊間の風習

表 2 にヒアリングで確認できた主な風習を、参加するコミュニティごとにとりあげた。隣組は近所同士 10～15 軒程の集まりで、豊間全域に存在した。かつては仏祝儀や農休みの集会なども一緒に行なった。隣組の風習は当番で決まった個人宅に各家から 1 人ずつ集まって行われることが特徴である。同性同士の集まりが多い。

町内ごとに行われるきゅうり天王と鳥小屋は、各家から 1 人が参加してそれぞれ決まった場所にお参りする。鳥小屋では子供が作った小屋^{注1)}に大人がお参りをする。また、大国魂神社のオシオトリは豊間地区外から神輿が出張って浜で御潮を浴びた後、由縁のある 3 町内^{注2)}を巡行するものである。八幡神社の獅子舞も 3 町内で行う。

豊間内の神社のオシオトリは各神社の神輿がそれぞれ決まった浜で御潮を浴び、海水を汲んで神社へ運ぶ過程で豊間全域を巡行する。諏訪神社の獅子舞は境内で行われ、豊間全域の住民たちで賑わう。

それぞれの町内で上記のような風習が頻繁に行われ、住民たちは日常的に交流を持つ機会が多かったといえる。なお、各風習の実施場所は図 1 に示した通りである。

3-2.旧家の間取りとコミュニティ形成

ここでは文久 3 年に建てられたという馬目酒店の母屋の間取りを例に、豊間の旧家の特徴を説明する。(図 2)

まず、仏間に造り付けの大きな神棚がある家が多く、十九夜様などの風習で大人数を招くときにこの部屋を広く使える造りになっていたことがあげられる。また、囲炉裏は家庭用のカミイロリと来客用のシモイロリの 2 つがある家が多い。来客用は玄関側の縁側に面しており、客は入ってすぐここへ通される。これらの特徴は、古くから住民同士の集まりが大切にされていたことを表す。

4.まとめ

豊間の先祖たちは住居を構える際に、高潮や津波が起きてもすぐに高台へ上られる山際を選択していたことが分かった。しかし、様々な要因により沿岸に接近して住宅が建てられるようになり、東日本大震災による津波ではそのほとんどが流失してしまった。

また、豊間には隣組や町内単位で行われる風習が数多く見られた。旧家で大人数をもてなせるような工夫が見られたことから、古くから住民同士の集まりが大切にされていたことが分かる。このようなつながりが非常時の共助につながる。高台移転後にコミュニティを再編する際にも、地域に古くからの土地の使い方や住民同士で集まる習慣を考慮することが望まれる。

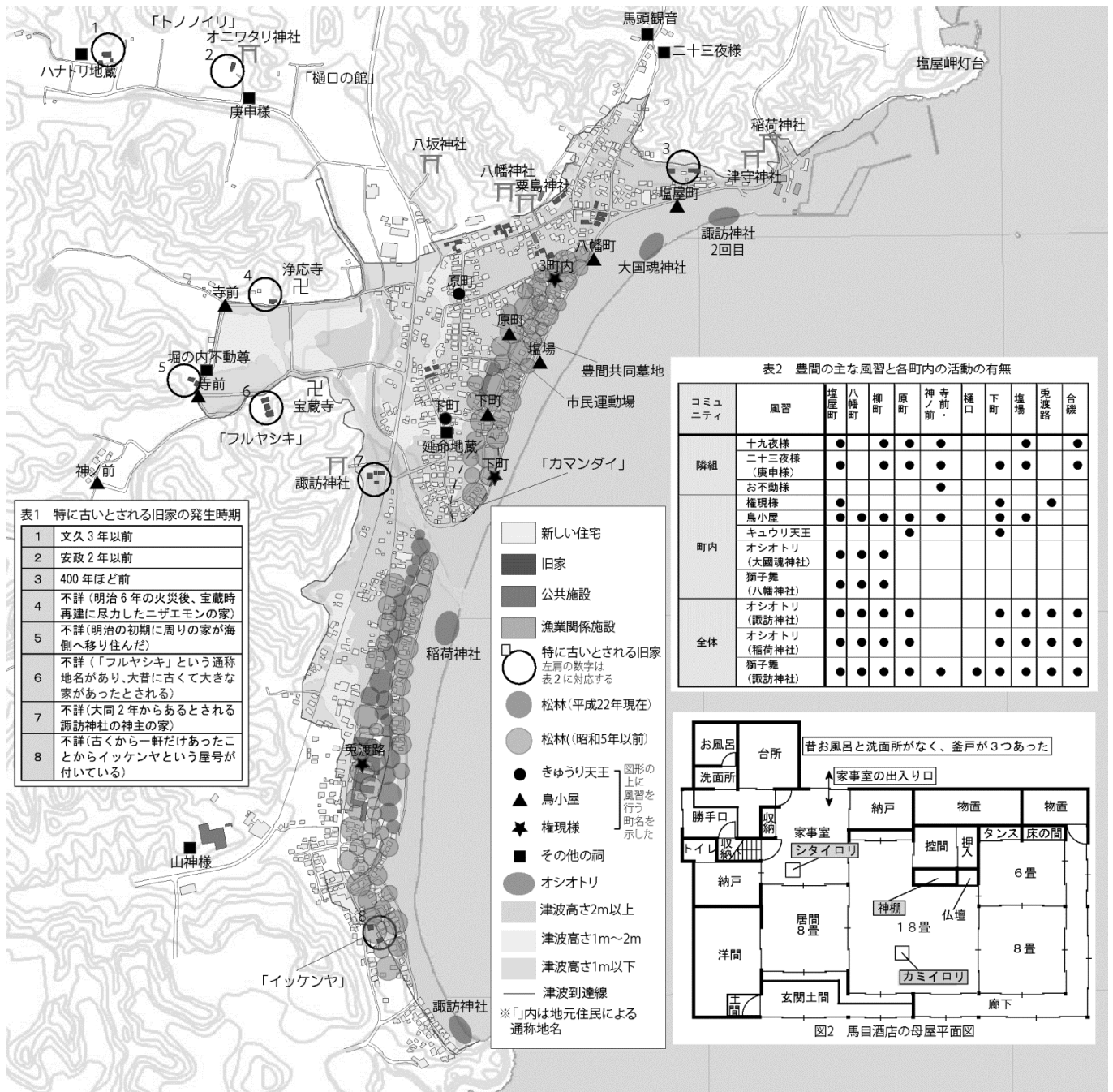


図1 集落の変遷と津波被害及び風習の実施場所

【注】

- 子供たちは正月の七日に小屋を建て、十四日まで小屋に集う。小屋は十五日に正月飾りと共に燃やす。
- 塩屋町、八幡町、柳町の総称。

【参考資料】

- 「平豊間の民俗」1981 早稲田大学日本民俗学研究会
- 「豊間の郷土史」1966 須藤春峰